

郷土新聞作りのポイントについて話す金巻さん(中央)と岩村さん(左)＝福井市の福井大附属義務教育学校



県中学生郷土新聞コンクール

最高賞2人 取材こつ伝授

中学生が夏休みの宿題で取り組む県中学生郷土新聞コンクール(福井新聞社主催)。毎年5千点以上の力作の中から最高賞の知事賞に選ばれた生徒は、さらに大野方面に延びるほどのように取材し、紙面を作っているのだろう。福井大附属義務教育学校でこのほど、2015年度に受賞した金巻明希さん(後期課程9年)は、通った。伝えたいことを明確に学んで利用するえちぜん鉄道勝山永平寺線終点の勝山駅から、さらには大野方面に延びる線路に疑問を持ち、廃線の歴史や住民の足を守るえちぜん鉄道の取り組みを調べた。

伝えたいこと明確に

15年度、16年度に知事賞に輝いた生徒2人と福井新聞社の徳島泰彦NIEコーディネーターによる対談が行われた。新聞作りを控え、同校が後期課程7年の社会科の授業の一環で企画し、119人が耳を傾けた。

対談では「文献や資料で調べ、疑問が湧いたら現地調査をした。できるだけ足を使っ」て多くの情報を集めるよう心がけた。地域住民や同鉄道の担当者に丹念に取材したことを振り返り「『鉄道を残していくために私たちが

イラスト、表で分かりやすく

徳島コーディネーターが新聞作りにかかった日数を尋ねると、金巻さんが約4週間とする一方、岩村さんは「生産者が近くに住んでいるのでインタビューも簡単に4日間ですみました」。2人とも読み手を意識した見せ方にこだわったと言います。「距離感が分かるよう人物を入れて写真を撮るよう」「表やイラストで分かりやすく」とアドバイスした。

金巻さんは郷土新聞のキーワードとして「つながり」を挙げ「調べたことが『自分』や『今』と、どつながっているかを考えることが大切。自分の街をアピールしたいという意欲を持って探究してほしい」と呼びかけた。(宇野和宏)